

原著論文

哲学と図書館情報学の関係：
図書館情報学における哲学に関する英語論文を基に

The Relationship between Philosophy and Library and Information Science: Based on English Articles about Philosophy within Library and Information Science

横山 幹子
Mikiko YOKOYAMA

Résumé

Purpose: This article discusses the relationship between philosophy and library and information science (LIS).

Method: The study uses a literature-based analysis of the relationship between philosophy and LIS. Important recent articles (published from May 2003 to April 2013) about philosophy in the field of LIS are collected, and their contents are analyzed.

Results: Most of the recent articles about philosophy in the field of LIS use philosophy (for example, neo-pragmatism, phenomenology, hermeneutics, and post-structuralism) to study LIS. These articles argue that philosophy can contribute to the development of LIS, but do not use philosophy as a foundation for LIS studies. That is, they do not claim that philosophy involves rational methods; rational methods are imported or applied to LIS, thereby making LIS a scientific field. However, philosophy appears in ontological or epistemological approaches to LIS studies. These articles argue the kind of ontological or epistemological approaches that can contribute to the development of LIS, using concrete examples from LIS studies. Examining whether an ontological or epistemological approach can contribute to the development of LIS is important not only for studies of LIS but also for studies of philosophy. Showing that such an approach is useful involves proving the appropriateness of the approach. Hence, philosophy and LIS are closely related.

横山幹子：筑波大学図書館情報メディア系 305-8550 茨城県つくば市春日 1-2

Mikiko YOKOYAMA: Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

e-mail: mikiko@slis.tsukuba.ac.jp

受付日：2013年9月9日 改訂稿受付日：2014年2月3日 受理日：2014年4月30日

哲学と図書館情報学の関係：図書館情報学における哲学に関する英語論文を基に

- I. はじめに
- II. 研究目的と方法
 - A. 研究目的
 - B. 研究の方法
 - C. 対象とした論文と分類
- III. 図書館情報学研究における哲学の現れ方
 - A. 「何らかの哲学を、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に望むための態度として提案するもの」
 - B. 「哲学を使って図書館情報学における中心概念を分析するもの」
 - C. 「哲学を使って図書館情報学における具体的な問題を解決しようとするもの」
 - D. 「図書館情報学において哲学的問題を考えることの重要性を主張するもの」
 - E. 「図書館情報学をどのように捉えるべきかについて論じたもの」
- IV. 図書館情報学研究における哲学の使われ方
 - A. 中心的话题
 - B. 「概念的枠組み・態度の提案」と哲学
 - C. 「中心概念の分析」と哲学
 - D. 「具体的問題の解決」と哲学
 - E. 「図書館情報学における哲学の重要性の主張」と哲学
 - F. 「図書館情報学をどのように捉えるべきか」と哲学
- V. 図書館情報学研究と哲学
- VI. おわりに

I. はじめに

図書館情報学には、さまざまな研究がある。『図書館・情報学研究入門』¹⁾の目次を見ただけでも、「図書館・情報学の位置づけと方法論」、「メディア・読書・リテラシー」、「情報組織化・情報検索」、「学術・専門情報の流通と管理」、「社会における図書館の意義と役割」とその対象範囲は広範囲にわたっている。哲学を主な専門分野とし、図書館情報学に接する機会に恵まれる環境にいる筆者は、そのような図書館情報学の多様な側面に触れる中で、図書館情報学と哲学の間にある密接な関係に着目した。そして、図書館情報学と哲学の関係を理解することが、哲学にとっても図書館情報学にとっても有意義だと考えた。しかし、何の手がかりもなく、抽象的に考察することはできない。それゆえ、まず、図書館情報学において哲学がどのように扱われているのかを整理することが必要であると考えた。

II. 研究目的と方法

A. 研究目的

図書館情報学に触れることの少ない人は、図書館情報学という学問を、漠然と「図書館についての研究」と捉える傾向にある。しかし、「図書館についての研究」と捉えるだけでは、図書館情報学研究を把握することは難しい。

実際、アカデミズムとプロフェッションという両方の側面を持ちながら、図書館情報学は、さまざまに定義されている²⁾。『図書館情報学用語辞典』第4版³⁾では、「図書館学に情報学が付け加わった研究領域。図書館学が中心とする図書館にかかわる諸現象、具体的には、制度、運営、書誌コントロール、資料、サービス、利用、それに施設などに加えて、情報やメディアの性質、それらの生産から蓄積、検索、利用までの過程を対象とする」³⁾[p.177]とされている。『図書館・情報学概論』の第2版⁴⁾では、「情報の発生から利用までの流れに焦点を当て、その中における諸記

録情報の発生、収集、蓄積、内容分析、検索などの機能を検討するとともに、その目的のために存在する主要な社会的機関の1つである図書館の役割、活動、関連諸技術およびその運営などについても論じていくという立場⁴⁾[p. 2]と規定されている。また、“人間の知的活動によって生産された情報の諸側面を研究する学問”⁵⁾[p. 185]や“社会における知識の共有を保持するという社会的価値を持つ総合的領域であり、人間の本質的なあり方としての知識共有という現象に注目した領域”⁶⁾[p. 31]という規定もある。

このような図書館情報学の定義の中に見られる、「人間の知的活動によって生産された情報」や「人間の本質的なあり方としての知識共有という現象」という言葉を見るならば、図書館情報学は、人間の知的活動や、知識共有を古くから扱ってきたと思える「哲学」と密接に関係している。実際、近年哲学の認識論で注目されている「社会認識論 (social epistemology)」という語は、図書館情報学において Shera によって使われたのが始まりである⁷⁾[p. 22]⁸⁾[p. 5]ということを考えるならば、図書館情報学と哲学に何らかの関係があるとしても不思議ではない。

また、図書館情報学自体も、一般に哲学的と呼ばれるものに無関心だったわけではない。たとえば、図書館情報学では、以前から自己の理論的基盤について論じられている。図書館情報学の教科書に登場するような、図書館情報学の理論的基盤についての、Butler や Shera, Ranganathan の代表的著作^{9), 10), 11)}があるだけでなく、図書館情報学の理論的基盤についての議論もさまざまになされている^{12), 13)}。そして、図書館情報学の理論的基盤を考える際、哲学、たとえば、ポパーの科学哲学が使われたりした¹⁴⁾。

しかし、図書館情報学と哲学の関係について論じられることが少なかったという指摘はさまざまどころでなされている。2005年の *Journal of Documentation* での「図書館情報学と科学の哲学」というテーマでの特集号¹⁵⁾のイントロダクション¹⁶⁾で、Hjørland は、“図書館情報学の共同体においては、科学の哲学に対する興味は、これ

まで、限定されたものだった”¹⁶⁾[p. 5]と述べている。また、同じ号で、Budd は、“図書館情報学が示している1つのことは、その分野への哲学的アプローチに関する懐疑主義である”¹⁷⁾[p. 44]と述べている。

けれども、そのような状況の中、図書館情報学の専門誌である、*Library Trends* と *Journal of Documentation* で、それぞれ2004年と2005年に、図書館情報学と哲学に関する特集が組まれている^{15), 18)}。そして、そのことは、図書館情報学内部で、その頃、哲学に関する関心が高まっていたことを示していると考えられる。

本論は、図書館情報学と哲学の関係についてどのように論じられてきたかを見ることで、図書館情報学と哲学の関係の可能性について考察することを目的としている。

B. 研究の方法

Library and Information Science Abstracts (LISA) で「図書館情報学」と「哲学」をキーワード¹⁹⁾として論文を検索する。2003年5月から2013年4月までの論文の中で、英語圏において英語で書かれた論文を取り上げる。まず、分類のための類型を示し、次に、論文内容に従ってそれらをいくつかのグループに分類し整理する。それらの整理を受けて、図書館情報学においてどのような点に着目して哲学的議論がなされていたかを明らかにし、どのような議論が今後必要とされるのかについて検討する。

ここで、LISA で検索したのは、LISA が図書館情報学における権威あるデータベースだと判断したからである。また、ここ10年という年限を区切ったのは、特集号が組まれた頃から現在に至る動きを検討したかったからである。特集号が組まれるということは、そのテーマについての議論が注目を浴びているということの意味する。図書館情報学と哲学の関係に注目が集まった後どのような動きが見られたかを検討するために、本論では10年という年限を区切った。また、英語圏において英語で書かれた論文を取り上げるということに関しては、2つの理由がある。1つは、英語

以外の外国語の解読が難しかったこと、もう1つは、図書館情報学の中心であると考えられる英語圏において動向を確認することによって、動向の概要がつかめると考えたことである。もちろん、なぜ論文だけを取り上げ、図書についての考察をしないのかという疑問も生じうる。しかし、著書はある程度論文での議論が体系化したあとで出されるものであると推測される。本論では、まだ体系化されていないとしても、どのような議論があるかの、もう少し流動的な動向を見たかった。それゆえ、著書を対象とせず、学術雑誌の論文だけを扱っている。

C. 対象とした論文と分類

本論で検討の対象とする論文を示す。検討すべき対象を選ぶ際に、ここでは、LISAで「図書館情報学」と「哲学」をキーワードとして、言語を英語に限定し、2013年5月に検索した。その結果、27件の文献が検索された。その中で、2003年以降の文献は、24件あった。ただし、そのうち2012年の文献1件は書評だったため、考察から省いた。また、それらの中には、特集号のイントロダクションやあとがきとして書かれたものが1件ずつ含まれていたが、それらの内容は図書館情報学と哲学の関係を考察するうえで注目に値すると思ったので、それらは検討対象とすることにした。その結果、第1表の23件の論文を検討の対象とする。なお、第1表は検討対象とする論文を、出版年による降順で表している。また、以下では、論文①のように、第1表における論文番号で論文を表すことにする。

本論では、上記の論文をその内容に従って分類するために、次の5通りのグループへの類型化を試みる。

- 類型1 何らかの哲学を、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度として提案するもの
- 類型2 哲学を使って図書館情報学における中心概念を分析するもの
- 類型3 哲学を使って図書館情報学における具体的な問題を解決しようとするもの

類型4 図書館情報学において哲学的問題を考えることの重要性を主張するもの

類型5 図書館情報学をどのように捉えるべきかについて論じたもの

ここでは、「哲学」は、「哲学の分野で主張されているさまざまな考え」ということを表している。そして、ここで言及されている「さまざまな考え」には、「…主義」や「…論」のような広い範囲から、特定の哲学者の思想のような限定されたもの、さらには、特定の哲学者の思想の一部や何かを分析する際の方法論のような狭い範囲のものまですべて含めることとする。また、存在論や認識論に関わる問題を「哲学的問題」と呼ぶ。つまり、「何が存在するか」、「我々は外界をどのようにして認識するのか」にまつわる諸問題を考えることを、「哲学的問題を考えること」だと捉えることにする。「図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度」では、「図書館情報学研究を行う際の視点・現象の捉え方」を考えている。たとえ図書館情報学研究がその枠組みや態度をとることによってどれほど改善されるかを述べるために具体例が使われるとしても、そのような提案自体は、理論的であり、図書館情報学研究に対する存在論的アプローチや認識論的アプローチを提案するものである。それは、「図書館情報学研究に対する具体的な方法」の提案とは区別される。「図書館情報学における中心概念」では、たとえば、「読書」や「絵本」のようなかなり焦点の絞られた概念ではなく、図書館情報学研究全般にかかわるような概念を念頭に置いている。それゆえ、「中心概念」として、たとえば、「情報」・「コミュニケーション」・「ドキュメント」・「図書館」のような概念が考えられる。

上記5つの分類は、筆者が、先の23件の論文を読み、内容を理解する過程において、区別したものである。もちろん、上記の分類が唯一の分類というわけではないし、また、それが主観性を持っているということも免れない。そのうえ、個々の論文を分類する際の厳密な基準があるわけではなく、曖昧な部分は確かに存在する。また、2つの分類の両方に関係しているように思われる

第1表 検討した論文

論文番号	著者名	掲載年	題名	掲載誌
①	Budd, J. M. Hill, H. Shannon, B. ²⁰⁾	2010	Inquiring into the real: a realist phenomenological approach	Library Quarterly
②	Jones, B. ²¹⁾	2008	Reductionism and library and information science philosophy	Journal of Documentation
③	Jones, B. ²²⁾	2005	Revitalizing theory in library and information science: the contribution of process philosophy	Library Quarterly
④	Hansson, J. ²³⁾	2005	Hermeneutics as a bridge between the modern and the postmodern in library and information science	Journal of Documentation
⑤	Radford, G. P. Radford, M. L. ²⁴⁾	2005	Structuralism, post-structuralism, and the library: de Saussure and Foucault	Journal of Documentation
⑥	Wikgren, M. ²⁵⁾	2005	Critical realism as a philosophy and social theory in information science?	Journal of Documentation
⑦	Savolainen, R. Talja, S. Tuominen, K. ²⁶⁾	2005	"Isms" in information science: constructivism, collectivism and constructionism	Journal of Documentation
⑧	Hjørland, B. ²⁷⁾	2005	Comments on the articles and proposals for further work	Journal of Documentation
⑨	Hjørland, B. ¹⁶⁾	2005	Library and information science and the philosophy of science	Journal of Documentation
⑩	Selden, L. ²⁸⁾	2005	On Grounded Theory—with some malice	Journal of Documentation
⑪	Johannisson, J. Sundin, O. ²⁹⁾	2005	Pragmatism, neo-pragmatism and sociocultural theory: communicative participation as a perspective in LIS	Journal of Documentation
⑫	Hjørland, B. ³⁰⁾	2005	Empiricism, rationalism and positivism in library and information science	Journal of Documentation
⑬	Budd, J. M. ¹⁷⁾	2005	Phenomenology and information studies	Journal of Documentation
⑭	Basden, A. Burke, M. ³¹⁾	2004	Towards a philosophical understanding of documentation: a Dooyeweerdian framework	Journal of Documentation
⑮	Frohmann, B. ³²⁾	2004	Documentation redux: prolegomenon to (another) philosophy of information	Library Trends
⑯	Budd, J. M. ³³⁾	2004	Relevance: language, semantics, philosophy	Library Trends
⑰	Hjørland, B. ³⁴⁾	2004	Arguments for philosophical realism in library and information science	Library Trends
⑱	Fallis, D. ³⁵⁾	2004	On verifying the accuracy of information: philosophical perspectives	Library Trends
⑲	Cole, C. Spink, A. ³⁶⁾	2004	A human information behavior approach to a philosophy of information	Library Trends
⑳	Furner, J. ³⁷⁾	2004	Information studies without information	Library Trends
㉑	Day, R. E. ³⁸⁾	2004	Community as event	Library Trends
㉒	Brier, S. ³⁹⁾	2004	Cybersemiotics and the problems of the information-processing paradigm as a candidate for a unified science of information behind library information science	Library Trends
㉓	Cornerius, I. ⁴⁰⁾	2004	Information and its philosophy	Library Trends

ものもある。しかし、上記の分類を使い整理することは、意義があると考えられる。なぜなら、それによって、図書館情報学においてどのような哲学的議論がなされていたのかを見るうえで、唯一ではないとしても、1つの見取り図を示すことができるからである。そして、1つの見取り図が提出されることによって、他の仕方での分類、整理へのきっかけが与えられるかもしれないからである。それゆえ、本論では、上記の問題点を理解したうえで、図書館情報学と哲学の関係を考えるための1つの方法として、先の23件の論文を、上記の5つのグループに分類し、整理していく。

III. 図書館情報学研究における 哲学の現れ方

A. 「何らかの哲学を、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度として提案するもの」

扱った23件の論文中、何らかの哲学を、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度として提案している論文（類型1に該当する論文）は、第2表に示される10件であった。まず、それらの論文の概要を簡潔に述べる。

Buddらは、論文①で、社会科学としての図書館情報学の研究において、実証主義の方法の代わりになりうるものとして、批判的实在論と現象学を統合したものを提案している。彼らによれば、たとえば統計的有意性を重視するような実証主義の方法だけでは図書館情報学の問題は解決されない一方で、事実の客観的な存在を拒否するような立場も受け入れられない。図書館情報学研究は、实在の客観的な存在を認めたいうえで、解釈を受け入れる研究の方法を必要とするのである。そして、その方法の基礎となるのが、Bhaskarの批判的实在論とHusserlの現象学（特に後期の）なのである。

Jonesは、論文②で、図書館情報学に相応しい哲学を考えるためには、還元主義の意味を考慮することが重要であるとし、図書館情報学研究の例を挙げながら、図書館情報学に相応しい哲学を発展させるためには、「非-還元主義」という立場が考えられなければならないと論じている。

Hanssonは、論文④で、解釈学を図書館情報学研究の認識論的な出発点、方法論と見なすことを提案している。彼によれば、図書館情報学での解釈学の使用は増えているが、研究対象の解釈的な特徴を解釈学的と見なしている研究が多い。しか

第2表 図書館情報学研究における哲学の現れ方

内容	論文番号	論文数
類型1 何らかの哲学を、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度として提案するもの	①, ②, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ⑪, ⑬, ⑰, ⑳	10
類型2 哲学を使って図書館情報学における中心概念を分析するもの	③, ⑤, ⑭, ⑮, ⑯, ㉑, ㉒	7
類型3 哲学を使って図書館情報学における具体的な問題を解決しようとするもの	⑩, ⑱	2
類型4 図書館情報学において哲学的問題を考えることの重要性を主張するもの	⑨, ⑫	2
類型5 図書館情報学をどのようにとらえるべきかについて論じたもの	⑲, ㉓	2

し、それは誤解であり、解釈学は、解釈的な過程の研究において使われる認識論的な出発点、方法論と見なされなければならない。

Wikgren は、論文⑥で、図書館情報学研究の哲学的基礎として、批判的实在論を提案している。ここで考えられている批判的实在論とは、Bhaskar によって科学哲学の動きとして始まったものであり、心から独立した实在の存在を認め、真理は事実との一致である点において、存在論的实在論であり、因果的説明が可能だと考えるものである。しかし、それは、知識がコミュニケーションによって構成され、説明的な知識は理論的、経験的理由に基づいて疑われると考えている点で、解釈学的な認識論的相対主義を受け入れている。ただし、その認識論的相対主義では、科学は任意のものではなく、合理的基準によってどの理論がよいか判断されるものである。

Savolainen らは、論文⑦で、経験や観察・歴史や社会的関係を通して個人が知識を作り出すと考える構成主義、知識の源は個人ではなく社会的なものであると考える集団主義、進行する会話において知識が生産されると考える構築主義を、情報探索・情報検索・知識形成についてのメタ理論として考え、すべてのメタ理論はそれ自身の応用可能性を持ち、それらはお互いに関係し補完し合っていると論じている。

Hjørland は、*Journal of Documentation* の「図書館情報学と科学の哲学」という特集号のあとがきである論文⑧で、特集号において図書館情報学の理論的および方法論的基礎の改良のためのさまざまな認識論的方法論的アプローチが示されたとしたうえで、図書館情報学の哲学的概念的枠組みを考える際には、さまざまな理論を利用する折衷主義が重要であると述べている。

Johannisson と Sundin は、論文⑩で、図書館情報学の強力な道具として、社会文化的視点と結びついた Rorty のネオプラグマティズムの認識論（反二元論・反表象主義・反本質主義という古典的プラグマティズムの伝統を受け継ぎながら、言語という道具に着目するもの）を提案している。

Budd は、論文⑬で、現象学の知見を図書館情報学に使うことを提案している。そこでは、Husserl, Heidegger, Schutz, Merleau-Ponty, Levinas, Ricoeur, Palmer らが言及されている。彼によれば、図書館情報学研究に臨む態度として現象学が重要なのである。

Hjørland は、論文⑰で、図書館情報学研究において、客観性を目指すことは重要であり、図書館情報学に实在論の視点が再導入されるべきだと論じている。

Brier は、論文⑳で、古典的機能的情報処理パラダイムでは、認識の社会現象的側面に注意が向けられておらず、合理主義的認識論や機械論的世界観に基づき、すべてが決定可能であるような現実的ではない世界が対象とされているので、メッセージの意味論的内容を生産者から利用者に伝えることに失敗しているとし、古典的機能的情報処理パラダイムに代わる、図書館情報学のための新しい概念的枠組みとして、サイバー記号論という考えを提唱している。第二階の (second-order) サイバネティックス (Heinz von Foerster や Ernst von Glasersfeld が代表者) と Peirce の記号論を結びつけた、学際的な枠組みとしてのサイバー記号論が、計算的側面も意味論的側面も包括できる、図書館情報学に新しい理論的な枠組みを提出するというのである。

次に、第2表で挙げた論文のうち、1つを取り上げ、検討する。ここでは、Hjørland の論文 (論文⑰) を取り上げる。なぜならその議論に関しては、たとえば、Bhaskar の批判的实在論とか Husserl の現象学等特定の思想について詳しい背景知識を持っていなくとも、議論の筋を追いやすいと考えたからである。そのために、まず、その論文の内容を先のものよりも少し詳しくまとめることから始める。

Hjørland は、論文⑰で、図書館情報学に实在論的視点を再導入すべきだと主張している。彼によれば、实在論者の基本的な主張は、心から独立した实在が存在するという点であり、反实在論的な立場とは、存在するのは、観念・概念・社会的構成物等だけである点と考える立場である。そし

て、そのように実在論の基本的な主張を示したうえで、彼は、ここで再導入すべきだと主張している実在論がどのようなものかを説明する。まず、形而上学的実在論の主張が、科学は世界の真の像を与えるという認識論的実在論から区別される。図書館情報学に導入されるべきと言われている実在論は、そのような認識論的実在論ではない。また、実在論は、経験主義・実証主義と混同されてもいけない。経験主義・実証主義は反実在論的立場を生じさせるものである。それは、たとえば、色の知覚が我々の知覚システムや脳に依存していると考えるように、主観的観念論を含んでいる。さらに、経験的研究も経験主義と混同されてはいけない。経験的研究が実在論の哲学に基づいてなされるべきなのである。同様に、主観性を客観性の論理的な反対語とみなし⁴¹⁾、人文学や解釈学を主観性と結びつけ、実証主義を客観的と結びつけるのも間違いであるとされる。客観的な法則も私がそれを真だと主張するならば、主観的な主張である。そして、ポストモダニズムの人たちが科学は客観性を目指すべきだと考えていないのは、主観性を客観性の論理的な反対語だとみなし、主観性が客観性を排除すると考えているからからだとし、すべての認識論は客観性を目指すべきだと論じるのである。

以上のように実在論を巡る混乱を整理した後で、次に、認知科学での反実在論的な考えが考察される。たとえば、行為を刺激に対する反応や学ばれた行動で説明する行動主義や、脳の過程の分析で説明する認知主義は、反実在論的である。それから、反実在論の傾向が、図書館情報学にも広がっていることが言及される。たとえば、適合性の研究では、利用者の適合性基準を研究することによって情報の適合性を確立しようとしている研究が多い。これは観念論的立場である。情報探索行動の文脈でも、利用者の情報探索行動を研究する際に、客観的な事実よりも利用者の主観的現象に注目する傾向がある。知識の組織化に関しても、組織化の原則がドキュメントに含まれるものの知識に基づくということを否定することにより、観念論的傾向を示している。しかし、観念論

的に、主観的現象にのみ注意を向けることは問題である。なぜなら、我々は客観性を求めるべきだからである。たとえば、利用者の情報行動は、客観的な事実に基づいて解釈されるべきなのである。彼によれば、研究が実在を反映していると考えることによって、その研究は他の探求者によっても確信されることができ、知識を蓄えていくことができるのである。それゆえ、哲学的実在論が図書館情報学に再導入されるべきなのである。

上記のまとめから、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度として、何らかの哲学がどのように提案されているのかが見て取れる。まず、ここで図書館情報学に再導入されるべきだと言われている「実在論」とはどのような考えなのかが、説明される。彼によれば、実在論者の基本的な主張は、心から独立した実在が存在するということである。それは、科学は世界の真の像を与えるという認識論的実在論とも、経験主義・実証主義とも区別される。また、実在論を考えると、経験的研究は経験主義と混同されてはならないということ、主観性を客観性の論理的な反対語と見なしてはならないということも述べられている。次に、認知科学における反実在論的な考えに言及したうえで、図書館情報学における実在論を巡る現状（反実在論的な傾向が広がっているということ）が説明される。そして、図書館情報学研究における反実在論的な傾向の問題点が、図書館情報学研究の例を挙げて論じられ、その問題点を避けるためには実在論的視点が再導入されるべきだと論じられているのである。

この研究を大きく2つに分けると、前半は、「実在論」をどのようなものとして捉えるかを論じており、後半は、図書館情報学研究に実在論的視点を再導入する必要性について論じている。これを、他の論文も含め総合的にまとめるなら、次のようになる。まず、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度として提案される「哲学」がどのようなものであるか説明される。それから、図書館情報学研究の概念的枠組み・図書館情報学研究に臨むための態度とし

て、当該の「哲学」が導入されるならば、図書館情報学研究の現状が改善されると論じられる。そして、このような論文の構造は、特集号のあとがきとして書かれた Hjørland の論文（論文⑧）を除くならば、どちらに重きを置くかの違いはあるにせよ、このカテゴリに分類した他の論文でも見て取れるのである。

B. 「哲学を使って図書館情報学における中心概念を分析するもの」

扱った 23 件の論文中、哲学を使って図書館情報学における中心概念を分析しようとする論文（類型 2 に該当する論文）は、7 件であった（第 2 表参照）。7 件には、「適合性」概念を分析したものも含めた。なぜなら、「適合性」概念は、たとえば「情報」概念ほどでないとしても、図書館情報学研究のかなり広い範囲に関わってくる重要概念だと考えたからである。A 節と同様に、まず、論文の概略を簡潔に述べる。

Jones は、論文③で、Ricoeur に代表される考えによって、図書館情報学における理論を生き返らせることができると論じ、その考えを使うことによって、「図書館」概念の分析を行っている。

Radford と Radford は、論文⑤で、Saussure の構造主義や Foucault のポスト構造主義の思想を使うことによって、現代における図書館の役割がどのようなものでありうるかを、分析している。

Basden と Burke は、論文⑭で、Dooyeweerd の意味に関する哲学を使って、ドキュメントの本質について検討している。

Frohman は、論文⑮で、Nunberg の情報という現象についての考え方や後期 Wittgenstein の考えを使って、情報概念を分析している。

Budd は、論文⑯で、Sperber, Wilson, Wittgenstein, Searle, Habermas らの考えを使って、適合性を考える際に役に立つ哲学的思想はどのようなものかについて論じている。それによれば、適合性について考えるためには、動的に考える必要があり、その適合性についての動的な考え方は、コミュニケーションの対話的理解を必要と

する。

Furner は、論文⑳で、「情報」概念を明らかにしようとする情報研究が盛んだが、言語哲学の意味論は、人間のコミュニケーションにおける基本的な現象を「情報」概念を使うことなく分析してきたので、取り立てて情報とはどのような概念かを研究することは不必要であることを論じている。

Day は、論文㉑で、情報やコミュニケーションの意味、情報技術やコミュニケーション技術の役割を、存在論や政治哲学と関連づけて論じている。

具体的に「哲学」がどのように使われているかを理解するためには、A 節と同様に、上記のうちの 1 つを取り上げ、もう少し詳しく検討することが役に立つ。ここでは、Radford と Radford の論文（論文⑤）を取り上げる。なぜなら、それは比較的、議論の流れがわかりやすく、「哲学を使って図書館情報学における中心概念を分析する」という構成が理解しやすいと考えたからである。そのために、まず、その論文の内容を少し詳しくまとめることから始める。

Radford と Radford は、論文⑤で、現代における図書館の役割を Saussure の構造主義や Foucault のポスト構造主義の思想を使って分析している。彼らは、Saussure の構造主義を、言語を閉じた体系として考え、その中の個々の要素を他のものとの関係で考えるものだとする。意味を名前と事物の対応と考えるのではなく、パターンと考える。世界がどのようなかを発見しようとするのではなく、人々が世界をどのように理解しているかを発見しようとする。そして、社会的構成物として実在を考えるのである。また、彼らは、Foucault のポスト構造主義を、社会的構成物としての実在を考える点においては構造主義を受け継ぎながら、言語体系を閉じたものと考えず、記述は状況に依存する、文脈的であると考えているものだとする。Foucault の「言説編成体 (discursive formations: テクストの集まりがお互いに関係付けられて組織化されるやり方)」は、現実の具体的なもの (Foucault にとつ

て中心的なのは、他の陳述の配置と一緒にって知識を生み出す陳述)なのである。そして、彼らによれば、そのような Foucault の知識についての見解は、図書館を理解するうえでの方法の1つである。図書館はテキストを組織化する仕事をするのであり、言説編成体を生み出す仕事をするのである。ただし、その考えでは、図書館の言説編成体は、1つである必要はない。図書館という術語は、異なる言語体系では異なる価値を持つ。そして、そのようなものとして図書館を捉えることは、知識を組織化するための制度化された図書館情報学の実践を巡る問題への新しい探求の道への可能性を示しているのである。

上記のまとめから、以下のことが見て取れる。まず、彼らが考察対象にしているのは、「図書館」という概念である。そして、「図書館」概念を分析するために、彼らが使っている哲学は、Saussure の構造主義や Foucault のポスト構造主義である。彼らは、特に、社会的構成物としての実在を考える点で Saussure の構造主義を受け継ぎながら、言語体系を閉じたものと考えない Foucault のポスト構造主義を利用している。そして、それを利用することによって、彼らは、「テキストを組織化し、言説編成体を生み出す」ものとして、「図書館」を捉え、そのうえで、図書館の言説編成体は、1つである必要はないと論じているのである。

これは、Saussure の構造主義や Foucault のポスト構造主義の説明の部分と、それを使った「図書館」概念の分析の部分の2つに分けることができる。一般的に言えば、利用する「哲学」の説明と、それを使うと問題としている概念をどのように分析できるかの説明を含んでいる。そして、当該カテゴリに分類した他の論文でも、このような論文の構造は見て取れるのである。

C. 「哲学を使って図書館情報学における具体的な問題を解決しようとするもの」

扱った23件の論文中、哲学を使って図書館情報学における具体的な問題を解決しようとする論文(類型3に該当する論文)は、2件であった

(第2表参照)。ここでも、まず、それらの概要を示す。

Selden は、論文⑩で、グラウンデッド・セオリーを図書館情報学研究の問題を解くための方法として利用するためには、それがどのように改良されなければならないかを論じている。グラウンデッド・セオリーとは、インタビュー等で得られた質的なデータを分析する方法で、コード化、カテゴリという概念を使って経験的データから理論を生み出そうとするものであり、質的調査法の1つである。この方法は、質的調査によって得られた結論が主観的であり反証可能ではないという批判を受けて生じた⁴²⁾。つまり、この方法を採用するかどうかということには、知識の主観性や客観性という認識論的な問題が深くかかっている。その意味で、グラウンデッド・セオリーは本論文で扱っている「哲学」であり、Selden の論文(論文⑩)は、図書館情報学研究の問題を解くために哲学を使っている。Fallis は、論文⑱で、Hume や Goldman の証言についての認識論が、記録された情報の正確さを検証する際に役に立つと論じている。

厳密に言えば、Selden は個別の具体的な問題を実際に解いているというよりも、具体的な問題を解くための方法を提示していると考えた方がよい。しかし、それは、図書館情報学を支える理論的背景を全面的に提示しようとするものでも、抽象的な概念を分析しているものでもない。むしろ、その議論は、実践に向けられている。具体的な問題を解くための実践的な方法が問題になっている。それゆえ、ここでは、それを「哲学を使って図書館情報学における具体的な問題を解決しようとするもの」というカテゴリに入れた。

具体的に「哲学」がどのように使われているかを理解するためには、ここでも、上記のうちの1つを取り上げ、もう少し詳しく検討することが役に立つ。ここでは、典型的な例と考えられる Fallis の論文(論文⑱)を取り上げる。その論文の内容の詳細は以下ようになる。

Fallis は、論文⑱で、Hume や Goldman の証言についての認識論が、記録された情報の正確さを

検証する際に役に立つということを、特にインターネット上の記録された情報に焦点を当てて論じている。インターネット上の不正確な情報の問題に対して図書館情報学者によって提出された、情報を評価するためのガイドライン（インターネット上の情報が正確であることを示す指標のリスト）がなぜうまくいくか、さらには、それらがどのように改良されうるかを、証言の認識論によって説明することができるというのである。

その際、まず、Hume や Goldman の議論についての説明がなされる。議論から分かることは、情報の正確さを検証するときに考えるべき4つの重要な領域があるということである。1つ目は、権威という領域である。ここでは、だれが証言しているのかという証言者の権威が問題になる。2つ目は、独立した確認作業という領域である。独立した確認作業が多ければ多いほど情報の正確さは増すのである。3つ目は、蓋然性と支持という領域である。ここでは、主張の蓋然性、その主張を支持するために与えられた理由が重要になる。4つ目は、プレゼンテーションという領域である。ここでは、証言をする仕方に注意が向けられる。

次に、それぞれの領域が、インターネット上の情報を評価するために現存するガイドラインとどのように関係するかが論じられる。たとえば、情報評価の際に、情報源が信頼できるという評判を得ているかを考慮すべきというアドバイスは、権威という領域と関係する。独立した確認作業の数に注目すべきということは、ウェブ上ではコピーが容易なので、注意が必要な領域になる。図書館情報学者が3つ目の蓋然性と支持という領域を強調してこなかったのは、理想的な状況という想定が必要だからであり、現実には常には理想的な状況ではないからである。4つ目のプレゼンテーションには、ウェブサイト上の正確さのアドバイスの多くが当てはまる。

以上のように、インターネット上の記録された情報の正確さのガイドラインを4つのカテゴリで考察した後で、その情報が正確か不正確かを決定する情報の検証可能性に着目することが重要であ

るとされ、検証可能性について論じられる。そして、検証可能性には程度の差があること、検証可能かどうかは検証している人の状況や能力に依存するということが、検証可能性の程度は変化しない静的なものではなく、1つの情報の検証可能性を増やすことができるということに注目する。そのうえで、情報評価の方法を教えるというやり方よりも、情報の検証可能性を増やすという視点で、たとえば、情報の組織化やメタデータやポータルサイトの発展等により、情報の検証可能性を増やすことによって、ウェブ上の記録された情報の正確さの問題に取り組むべきだと論じるのである。

上記のまとめから、次のことが見て取れる。Fallis が問題として取り上げているのは、「記録された情報、特に、インターネット上の記録された情報の正確さを検証する際、何が重要か」ということである。そして、その問題を解くために利用されているのが、Hume や Goldman の証言についての認識論である。それを使うことによって、記録された情報の正確さの検証という問題に対して提言を行っているのである。彼の議論は、大きく分けるならば、Hume や Goldman の証言についての認識論を説明する部分と、それを図書館情報学の具体的な問題に適用しその問題についての提言を行う部分の2つの部分に分けられるのである。

Selden の論文（論文⑩）の場合も、類似の構造を持っている。まず、グラウンデッド・セオリーについての説明がなされ、次に、図書館情報学研究にグラウンデッド・セオリーを実際に適用してみることによってグラウンデッド・セオリーのどこが改善されるべきかが論じられるのである。それを一般的に言うならば、利用する「哲学」を説明する部分、それを図書館情報学に適用する部分の2つの部分に分けられるということになる。

D. 「図書館情報学において哲学的問題を考えることの重要性を主張するもの」

扱った23件の論文中、図書館情報学において哲学的問題を考えることの重要性を主張する論文

(類型4に該当する論文)は、2件であった(第2表参照)。まず、それらの概略を示す。

Hjørlandは、論文⑨で、哲学的な問い、メタ理論や科学の哲学が、図書館情報学にとって重要であり、図書館情報学のさらなる発展に寄与することができるということを主張している。それは、先にも述べたように、*Journal of Documentation*の「図書館情報学と科学の哲学」という特集号¹⁵⁾のイントロダクションとして書かれたものである。

類型4に属するHjørlandの別の論文(論文⑫)は、経験主義、合理主義、実証主義といった認識論が図書館情報学研究に影響を与えており、認識論の問題を考えることは図書館情報学にとって重要であるということを論じているものであり、その特集号の中の論文である。

具体的にどのように論じられているかを理解するためには、上記のうちの1つを取り上げ、もう少し詳しく検討することが役に立つ。ここでは、Hjørlandの論文(論文⑫)を取り上げる。なぜなら、先に述べたように、もう1つのHjørlandの論文(論文⑨)は、特集号のイントロダクションとしての役割を果たすものであり、典型例ではないと考えたからである。

Hjørlandは、先に述べたように、論文⑫で、経験主義・合理主義・実証主義といった認識論の問題を考えることの図書館情報学にとっての重要性を指摘している。そのために、まず、彼は、経験主義とは何か、合理主義とは何か、実証主義とは何かということを説明する。

彼によれば、経験主義とは、経験を、知識を得るための重要な、もしくは、唯一の方法と見なす認識論的な考えである。経験主義における基本的な方法は、観察と帰納⁴³⁾であり、情報を処理する際の「ボトムアップ」の方法と関係している。そして、他の立場からは、経験を、我々の理論や視点等から独立したものと考えている点が問題だと批判される。

合理主義とは、概念的な明晰さを重視し、演繹的方法を好む認識論であり、情報を処理する際に「トップダウン」の方法を使う傾向がある。ただし、合理主義は、経験主義と同様に、知識を得る

ための方法が研究者の理論や視点等から独立だと考えている。

実証主義とは、本質と現象に違いはないと考え、唯名論を取り、価値判断や規範的な陳述に認識的価値を与えることを否定し、科学的方法には本質的な統一性があると考えることによって特徴づけられるものである。それは、もともと、理論的研究を否定するものではなく、経験主義と同じではない。また、実証主義は、量的方法を使うことと同じではないし、自然科学の見解でもない。

実証主義の1つである論理実証主義は、形而上学を攻撃している点では経験主義に近いが、経験主義が心理主義に基づき、知覚の重要性を強調した一方で、論理実証主義は、反心理主義であり、言語における知識に関係している。論理実証主義者によれば、知識とは言語で定式化されるものであり、そのような知識は、現代の記号論理学の助けを得て、私的で直接的な経験の言語的報告である要素文に還元され、また、要素文から構成される。そして、「このリングが赤い」という文が、このリングが赤いという感覚経験と結び付けられて初めて意味を持つように、文の意味とは、当該の文がどのように検証されるかという検証条件であり、検証されない言説は、意味のないものである。要素文は検証されるなら、真であり、反証されるなら、偽である。そして、検証可能な知識だけが知識であり、それは科学の知識である。

彼によれば、実証主義は研究方法の選択だけを含むものではなく、世界観や、探求対象をどう考えるか、意味や人間の心についてどう考えるか等さまざまなことを含むものである。そして、実証主義の考えは、研究者と実在は不可分であり、世界についての知識は人の生きてきた経験を通して志向的に構成され、その生きてきた経験の意味構造に光を当てることが重要であると考えられる解釈主義と矛盾する。ただし、実証主義が実在論、解釈主義が反実在論と分けられるというのは誤解である。また、経験的研究と経験主義を混同するのも間違っている。経験主義以外の認識論も、経験的研究の方法論について考えている。

そのように、経験主義・合理主義・実証主義に

ついて説明したうえで、彼は、認識論的研究は、研究者がどのようにして文献を利用するかと関係しているの、情報研究の出発点となりうると言うのである。その中で、彼は、図書館情報学における、経験主義、合理主義、実証主義について考察する。彼によれば、実証主義がもはや図書館情報学において支配的ではないという考えもあるが、それは間違っている。そして、それを示すために、いくつかの例が挙げられる。彼によれば、索引作成者間の一貫性についての研究では、同じドキュメントに索引をつける際の同意の数を数えることを重視しており、主観的な知識を考慮しておらず、索引作成者を機械のように考えている。適合性研究では、情報検索の実験において2つのシステムの結果を比較し評価する際に、変数の間の相関関係だけを考慮して原因についての考察をしていない。また、認識に関する見解についても、情報システムデザインの基礎を与えるために、利用者の抽象的で一般化されたモデルを与えようとする傾向がある。そのように、実証主義は、まだ、図書館情報学研究の中で支配的なのである。

以上のように、彼は、この論文において、経験主義、合理主義、実証主義という認識論を定義し、図書館情報学研究の例を挙げることによって、どのような認識論の立場をとるかということが、研究者がどのように文献を利用し、研究を行うかということと密接に関係していること、図書館情報学ではまだ実証主義が支配的であるということを示し、図書館情報学において認識論的研究が必要だと主張しているのである。

上記のまとめから、以下のことが見て取れる。Hjørland は、論文⑫で、まず、図書館情報学研究に影響を与えている認識論として、経験主義・合理主義・実証主義を挙げ、それらがどのような考えかを説明する。そして、図書館情報学研究の具体的な研究の例を挙げ、図書館情報学ではまだ実証主義が支配的であるということ、実証主義という認識論的立場を取ることにより図書館情報学研究に与えられる影響を示すことによって、認識論的研究と図書館情報学研究の密接な関係を示し、図書館情報学における認識論的研究の必要性

を主張している。

上記の議論は、大きく分けて、2つの部分に分けられる。その2つとは、図書館情報学研究に大きな影響を与えている認識論の説明、および、図書館情報学での認識論の現状を踏まえたうえでの哲学的研究の重要性の指摘である。

E. 「図書館情報学をどのように捉えるべきかについて論じたもの」

扱った23件の論文中、図書館情報学をどのように捉えるべきかについて論じた論文(類型5に該当する論文)は、2件であった(第2表参照)。まず、その概要を確認する。

Cole と Spink は、論文⑬で、人間の情報行動と Floridi の情報哲学の間には強い関係があるということを論じている。そして、人間の情報行動という視点によって、情報哲学の教義や理論的な構成概念が、情報に関係する理論的な問題や現実の世界の問題に応用されることが示され、人間の情報行動という視点は図書館情報学を応用された情報哲学と考えることを促進すると主張する。

それに対して、Cornerius は、論文⑭で、図書館情報学の歴史と職業的な図書館の仕事の実践を証拠として、Floridi の情報哲学の問題点を指摘し、個々人の解釈に基づいて情報について考えるべきだと主張している。

これらは、何らかの既存の哲学を図書館情報学研究に使おうという立場をとるのではなく、図書館情報学の定義自体を問題にしている点で、今まで見てきたカテゴリとは異なる。もちろん、ここで、両論文とも「Floridi の情報哲学」を使っているのではないかという指摘がなされるなら、それはもっともである。しかし、「Floridi の情報哲学」は、図書館情報学研究に使われているというよりもむしろ、図書館情報学という学問領域をどのようなものと規定するかと関わっている。情報哲学に賛成する立場にしても、それに反対する立場にしても、知的活動としての図書館情報学研究そのものをどのように捉えるかに関係している。

理解を深めるために、Cornerius の論文(論文⑭)を取り上げ、もう少し詳しく検討する。なぜ

なら、Cole と Spink の論文（論文⑱）は、かなり詳細な背景知識を必要するため、Cornerius の論文を検討した方が、理解しやすいと考えたからである。

Cornerius は、論文㉓で、Floridi の情報哲学の問題点を指摘し、個々人の解釈に基づいた情報についての考え方を提案している。彼が指摘する Floridi の情報哲学の問題点は3つある。1つ目の問題は、Floridi が情報について持っている考えについてのものである。2つ目は、Floridi の情報哲学では、図書館情報学を応用された情報哲学と見なし、図書館情報学を物質的なものに基づいた専門分野だと考えている点である。そして、3つ目は、社会認識論を、図書館情報学を基礎づける説明と考えず、図書館情報学の一部であると格下げした点である。

彼は、それらが問題だということを論じるために、まず、図書館情報学がどのように構成されているかを確認する。彼によれば、広い分野としての図書館情報学は、19世紀の中ごろに哲学から分かれた。そして、そのような図書館情報学は、実践的な仕事を解決することに重きを置いているとはいえ、学問への方向性と実践への方向性の2つを持っている。20世紀になり、図書館情報学は、再構成され、図書館やドキュメントを使う個々の人々の行動も、実践的な仕事と同じ程度の関心をもたれるようになる。そして、それらの行動を社会的実践の内部で説明しなければならないと考えるようになる。その一方で、やはり、多くの図書館員は、実践的方向性を持ち、情報の本質の理解を気にせず、日々の仕事に満足している。

そのように、図書館情報学がどのように構成されているかについて確認したうえで、彼は、そのような状況で Floridi の情報哲学が魅力的であるとするならば、情報哲学は、広い範囲の現象や実践を説明し、我々が時代時代で、自分自身をどのように再形成しているかを説明できなければならないが、それはできないと言うのである。

まず、Floridi が図書館情報学を規範的な研究だとしたことは、あまりに大雑把である。Floridi は、図書館員による図書館の仕事のマネーメン

トのための実践的な仕事と図書館情報学の構造を区別することに失敗している。実践的な仕事に関しては、その多くは、規範的ではない。蔵書構築は、規範的な実践であるかもしれないが、その場合も、公共図書館に限定される。また、利用者の規範的な枠組みを採用することなしには、図書館情報学は規範的にはなりえない。なぜなら、図書館情報学の対象の1つとして、知識の組織化があるが、主題書誌の構成の例を考えるとわかるように、知識の組織化が成功するためには、利用者が何を受け入れるかが反映されていなければならない。利用者の規範的な枠組みを採用することなしでは、それは規範的にはなりえないからである。

それから、Floridi が図書館情報学を物質的なものに基づいた専門分野だと考えている点にも問題がある。Floridi は、図書館情報学を物質的な材料を扱うものだと考える。図書館情報学の対象は、知識を可能にする情報源であり、図書館員の興味はその源に限定されると考えている。情報についての問いを扱う図書館情報学は、社会認識論よりも基礎的なものである。しかし、ドキュメント管理の科学を打ち立てることだけでは、図書館について理解することはできない。我々の文化に含まれているものの考察が必要なのである。図書館の仕事は、ドキュメント管理の技術に還元されることはできない。図書館の仕事は、社会的知識についての社会学と密接に関係している。そして、そのことは、図書館情報学を物質的なものに基づいた専門分野だと考えられないということだけでなく、社会認識論を図書館情報学の一部であると格下げすることができないということも示しているのである。

さらに、Floridi が、情報を、メッセージを伝達するシステムと考えている点にも問題がある。なぜなら、そのように考えるならば、情報を現象として論じることが出来なくなるからである。言語は社会的構成物であり、メッセージの意味も社会的に構成されるのである。我々は、情報が我々の目的や実践や社会的文脈とどう関係しているかを考慮する必要があるものであり、情報がその受け手から独立して有意味な客観的な存在であると考

えるべきではないのである。

以上のように、彼は、Floridi の情報哲学の問題点を示し、Floridi の図書館情報学の説明は、改訂が必要であると論じるのである。

以上のまとめから、Cornerius の論文（論文⑭）の論点が、Floridi の情報哲学の問題点を指摘することにあるということが見て取れる。しかし、それは、単に問題点の指摘だけではない。問題点を指摘する際に、「情報」概念をどのようなものとして捉えるべきか、という点が考察されている。また、その「情報」概念をどう捉えるかということが、図書館情報学をどのように捉えるべきかということにもつながっている。そして、このように、「情報」概念を検討し、それを使って図書館情報学をどのようなものとして捉えるべきかを考察している点は、Cole と Spink の論文（論

文⑰）にも共有されているのである。

IV. 図書館情報学研究における哲学の使われ方

A. 中心的な話題

第 III 章において図書館情報学研究における哲学の「現れ方」を整理した結果、類型 1 に該当するものが 10 件と一番多く、次に類型 2 に該当するものが 7 件と続き、それら 2 つで 7 割以上を占めている（第 2 表参照）。

また、第 3 表に見られるように、「概念的枠組み・態度の提案」と「中心概念の分析」と「哲学」を使う対象は異なるとはいえ、類型 1 に該当する論文も類型 2 に該当する論文も、図書館情報学研究に「哲学」を使うことを目指している。そして、図書館情報学研究における具体的な問題に

第 3 表 図書館情報学研究における哲学の使われ方

内容	論文番号	哲学	具体的対象
類型 1	①	批判的実在論, Husserl の現象学	—
	②	非-還元主義	—
	④	解釈学	—
	⑥	批判的実在論	—
	⑦	構成主義, 集団主義, 構築主義	—
	⑧	折衷主義	—
	⑪	社会文化的視点と結びついた Rorty のネオプラグマティズムの認識論	—
	⑬	現象学 (Husserl, Heidegger, Schutz, Merleau-Ponty, Levinas, Ricoeur, Palmer 等)	—
	⑰	実在論	—
	⑳	サイバー記号論	—
類型 2	③	Ricoeur	「図書館」概念
	⑤	Saussure の構造主義, Foucault のポスト構造主義	「図書館」概念
	⑭	Dooyeweerd の意味に関する哲学	「ドキュメント」概念
	⑮	Nunberg の情報という現象についての考え方, 後期 Wittgenstein	「情報」概念
	⑯	Sperber, Wilson, Wittgenstein, Searle, Habermas 等	「適合性」概念
	㉑	言語哲学の意味論	「情報」概念
	㉒	存在論・政治哲学	「情報」概念・「コミュニケーション」概念
類型 3	⑩	グラウンデッド・セオリー	—
	⑱	Hume や Goldman の証言についての認識論	記録された情報の正確さ

「哲学」を使って答えようとしている類型3に該当する論文も、図書館情報学研究に「哲学」を使うようとしている点では、同じである。

類型1, 類型2, 類型3に該当する論文は、図書館情報学研究に「哲学」を使うことで、図書館情報学研究における何らかの成果が得られると考えているのである。では、「哲学を使って」で意図されていることは何なのだろうか。それを理解するために、まず、類型1から類型3に該当する論文について、その内容を詳しく検討していく。また、そのあとで、「哲学を使って」と類型4や類型5に該当する論文の関係について考察する。

B. 「概念的枠組み・態度の提案」と哲学

「哲学を使って」図書館情報学研究の概念的枠組み・態度を提案できるということは、哲学によって、科学(学問)としての図書館情報学が基礎づけられるということの意味するのだろうか。そして、その際の「基礎づけ」は、「哲学が、何らかのものが科学(学問)であるための一般的な方法を与えることができ、その方法を使うことによって図書館情報学が科学(学問)であることが示される」ということを意味するのだろうか。もしそのような意味で、哲学を使った「概念的枠組み・態度の提案」が考えられているとしたら、それは、現在の哲学の主流からは外れている。

哲学が科学(学問)の基礎づけを行うことができるという考えは、現在、主流ではない。たとえば、「哲学が具体的事象から離れて、知識に到達するための一般的な方法を与えることができるという考え」や「哲学は知識一般の基礎づけをすることができるという考え」(本論文ではこうした考え方を「基礎づけ主義」と呼ぶ)は、もはや主流ではない⁴⁴⁾。

確かに、このような基礎づけ主義的な考えは、たとえば、20世紀初頭の論理実証主義に見られる。論理実証主義は、知識と呼ぶに値するものは、いくつかの経験的に検証できる命題と規約によって真である命題に基礎を持つと考え、そのように得られた知識こそが本当の知識であるとした。そして、知識に到達するための一般的な方法

を与えようとした。しかし、現在では、多くの人が、論理実証主義には問題があったと考えている。たとえば、Quineは、論理実証主義に見られる、分析的命題と総合的命題を明確に区別できるという考えや還元主義という考えはドグマであるとして、論理実証主義を批判している⁴⁵⁾。

そのように、哲学内部においてさえ、基礎づけ主義的な考えは、主流でなくなっているのである。もし、基礎づけ主義的な考えが哲学内部においてさえ主流でなくなっているという状況の中で、「哲学を使って」ということで、普遍的な学問としての哲学が個別科学としての図書館情報学の研究の基礎を与えることができると主張されているのだとしたら、それはあまりに的外れなのではないだろうか。

しかし、実際に、類型1に該当する論文で行われていることを精査してみると、上記の意味で、「哲学を使って」ということが考えられているわけではないということが見て取れる。

Buddらは、論文①で、実在の客観的存在と解釈の両方を受け入れることができるような図書館情報学研究に臨む態度として、批判的実在論と現象学の存在論や認識論を使おうとしていた。Jonesの論文(論文②)における還元主義と非還元主義の検討の目的は、図書館情報学研究への視点としてどのような考えが適切かを論じることにあった。Hanssonの論文(論文④)では、解釈学が図書館情報学研究の認識論的な出発点とされていた。Wikgrenも、論文⑥で、批判的実在論をとることによって、認識論的相対主義を受け入れつつ、合理的基準も認めることができるような研究の視点を得ることを目指していた。Savolainenらは、論文⑦で、構成主義・集団主義・構築主義がどのような場合に図書館情報学のメタ理論になりうるかを論じていた。Hjørlandの特集号のあとがきとしての論文(論文⑧)は、認識論的方法論的アプローチを示すものとして哲学を捉えていた。JohannissonとSundinは、論文⑩で、社会文化的視点と結びついたRortyのネオプラグマティズムの認識論を図書館情報学研究の視点として考えていた。Buddは、論文⑬で、図書館情報

学研究に臨む態度として現象学を提案していた。Hjørland のもう1つの論文(論文⑱)では、実在論の視点を図書館情報学に導入することの大切さについて論じられていた。Brier は、論文㉒ で、サイバー記号論により、図書館情報学研究のための新しい理論的枠組みを与えることを提案していた。

以上のように、哲学の利用は、「個別科学に基礎を与え、知識に到達する唯一の正しい方法を手に入れるため」というよりはむしろ、「存在論的、もしくは、認識論的にどのような立場をとることによって、図書館情報学研究をより実りあるものにできるのかを示すため」になされていたのである。

実際、図書館情報学にとって哲学の考察が重要だと主張している Hjørland 自身、哲学は理論と合理的方法についてのものであり、個別科学はただ経験的な探求にのみ関係しているという見解が正しくないことは明らかだと言っている¹⁶⁾[p. 6]。

類型1に該当する論文は、図書館情報学研究に対する存在論的、もしくは、認識論的アプローチとして適切であると思える考えを説明し、図書館情報学研究に対して当該の存在論的・認識論的アプローチ⁴⁶⁾をとるなら図書館情報学研究にとってどのような利点があるかを示そうとしているのである。

C. 「中心概念の分析」と哲学

類型2に該当する論文でなされている「哲学を使った中心概念の分析」において、「哲学を使って」はどのような意味で言われているのだろうか。類型2に該当する論文で行われていることを精査すると、ここでも、「哲学を使って」は、基礎づけ主義的な考えを背景にするものではないということが見て取れる。なぜなら、それらの論文でなされている概念分析は、使用された哲学が提案する「概念的枠組み・態度」と相互に密接に関係しており、また、前節でみたように、哲学を使うことによる「概念枠組み・態度の提案」は、基礎づけ主義的な考えを主張するものではないから

である。以下で、類型2に該当する論文での哲学を使った概念分析がどのようになされていたかを見ることによって、それらの論文でなされている概念分析は、使用された哲学が提案する「概念的枠組み・態度」と相互に密接に関係しているということを確認する。

Jones は、論文③で、Ricoeur の考えを使い、主観と客観を明確に区別するのではない研究態度を提案し、その態度で「図書館」概念を分析するならば、図書館は、意味論的革新の達成であると同時に、意味論的革新への寄与であり、テキストをためておく場所ではなく、新しい意味が生み出される場所になると論じていた。

Radford と Radford は、論文⑤で、Saussure の構造主義や Foucault のポスト構造主義の考えを使い、言語を、構造を持つ体系だと考え、その体系を文脈的なものと考えた視点を提案し、その視点で「図書館」概念を分析するならば、図書館は、テキストを組織化する仕事をするもの・言説編成体(1つである必要はない)を生み出す仕事をするものと捉えられるとしていた。

Basden と Burke は、論文⑭で、Dooyeweerd の意味についての哲学の中に「ドキュメンテーション」概念を分析するために重要な研究態度を見ていた。そこで使われていたのは、Dooyeweerd の意味についての哲学における、意味についてさまざまなアスペクト(たとえば、エネルギーや質量についての物理的意味のアスペクトや感覚や感情などの感覚的意味のアスペクト等)を考える点、主体と客体をアスペクトが変われば変わるものとして捉える点、存在と規範を互いに対立するものとして捉えない点だった。

Frohman は、論文⑮で、Nunberg や後期 Wittgenstein の考えを使い、「意味とは何か」、「情報とは何か」という問いに対する、実体的な答えは存在しないという視点で、情報概念について分析していた。そして、情報について考える際にドキュメント的実践が重要だと述べ、ドキュメント的実践は存在論的に情報に先行するものであり、情報の哲学はドキュメンテーションの哲学に基礎づけられることを主張していた。

Budd は、論文⑬で、コミュニケーションの対話的理解という視点と、「適合性」概念を動的に考えることの密接な関係を指摘していた。

Furner は、論文⑳で、言語哲学における意味論を使うならば、人間のコミュニケーションに基本的な現象を「情報」概念を使うことなく説明できるので、「情報とは何か」という問題を問う情報研究は不必要であるとしていた。

Day は、論文㉑で、共同体は、個人が先にありそれが理性により結びついたものではなく、我々は存在論的に常に既に共同の状態にあるという認識を示し、共同体がそのように考えられた場合、情報技術やコミュニケーション技術は、表現の手段としてではなく、事物を生み出す際の共同責任 (coresponsibility) という様態で考えられようとしていた。

以上のように、類型 2 に該当する論文は、ある「哲学」が提案する、ある「概念的枠組み・態度」をとって、ある「概念」を分析するならば、しかじかの結果が得られるということを主張していたのである。そのように、そこでの概念分析は、使用された哲学が提案する「概念的枠組み・態度」と密接に関係しているのである。

そうだとするならば、類型 2 に該当する論文においても、哲学の利用は、「個別科学に基礎を与え、知識に到達する唯一の正しい方法を手に入れるため」というよりはむしろ、「存在論的、もしくは、認識論的にどのような立場をとるなら、図書館情報学にとって中心的な概念をよりよく分析できるのか」という視点でなされていたと考えることができる。類型 2 に該当する論文も、図書館情報学研究に対する存在論的・認識論的アプローチとして適切であると思える考えを説明し、図書館情報学研究に対して当該の存在論的・認識論的アプローチをとるなら図書館情報学における中心概念をどのように分析できるかを示そうとしているのである。

D. 「具体的問題の解決」と哲学

類型 3 に該当する論文は、特定の哲学者の思想の一部や方法論といった、かなり限定された考え

を取り上げ、それによって、具体的な問題を解こうとしていた。使われていたものは、Selden の論文 (論文⑩) では、具体的な方法論としてのグラウンデッド・セオリーであったし、Fallis の論文 (論文⑬) では、Hume や Goldman の哲学の一部である証言についての認識論であった。

それらは、たとえ利用する哲学の説明と図書館情報学研究への適用という論文の構成としては同じであるとしても、どのような存在論的・認識論的アプローチをとることが図書館情報学研究にとってよいかという視点での議論をしているわけではなかった。むしろ、ハサミが紙を切る「便利な道具」であるように、ある問題を解決するための「便利な道具」として、何らかの哲学が使われていたのである。

だとすると、ここでの「哲学を使って」の意味は、類型 1 に該当する論文や類型 2 に該当する論文の場合と異なっていると考えた方がよい。

もちろん、この意味での「哲学を使って」を無視することはできない。しかし、類型 3 に該当する論文の数が少ないことは、それが、図書館情報学と哲学の関係を論じている際の、「哲学を使って」の主要な意味でないことを示していると思われる。

E. 「図書館情報学における哲学の重要性の主張」と哲学

類型 4 に該当する論文は、直接哲学を使って何らかの主張をしているものではない。特集号のイントロダクションとして書かれた Hjørland 論文 (論文⑨) では、図書館情報学のメタ理論を考察することが必要だと論じられていただけであり、類型 4 に該当する Hjørland の別の論文 (論文⑫) も、哲学と図書館情報学には関係があることを論じていただけである。しかし、このような重要性の主張は、類型 1 や類型 2 に該当する論文での意味で「哲学を使って」図書館情報学研究をするための準備段階としてなされたものだと考えることができる。実際、同著者の他の論文 (論文⑧、論文⑰) は、類型 1 に該当している。類型 4 に該当する論文においても、存在論的・認識論的にどの

ようなアプローチをとるかが図書館情報学と密接に関係していることを主張している際に、類型1や類型2での「哲学を使って」と同じことが、念頭に置かれていると考えられるのである。

以上のように考えるならば、類型4に該当する論文でも、類型1や類型2と同じ意味での「哲学を使って」という考えが間接的にはあるが見て取れる。

F. 「図書館情報学をどのように捉えるべきか」と哲学

類型5に該当する論文では、「哲学を使って」という考えは現れているのだろうか。先に述べたように、これらの論文は一見したところ、何らかの既存の哲学を図書館情報学研究に使おうとしているものではない。それは、知的活動としての図書館情報学研究をどのように捉えるかに関係していた。けれども、そこには、存在論的・認識論的前提があるように思える。

ColeとSpinkの論文(論文⑱)とCorneriusの論文(論文㉓)は、Floridiの情報哲学に賛成するか反対するかで立場が分かれていた。両者の違いは、情報をどう捉えるかということと密接に関係していた。そして、情報をどう捉えるかということは、存在論的・認識論的にどのようなアプローチをとるかと密接に関係していると思われるのである。

それを確認するために、第III章のE節で見たCorneriusの論文(論文㉓)の内容を振り返ってみよう。そこでは、Floridiの情報哲学に対する批判がなされ、図書館情報学を物質的なものに基づいた専門分野と考えている点や、情報をメッセージの伝達システムと捉えている点がFloridiの情報哲学の大きな問題点だとされていた。私は、その議論の背後に、存在論的・認識論的前提の対立を見て取ることが出来ると思う。

まず、批判されている立場を見てみよう。図書館情報学を物質的なものに基づく専門分野であり、情報をメッセージ伝達システムと捉える立場は、情報を、それを受け取る人から独立したものと考える立場になる。そして、情報を、それを

受け取る人から独立したのだと考えるのは、存在論的前提の1つである。また、我々から独立した客観的な存在としての情報を我々が認識するのだという考えは、認識論的前提の1つである。そのように、批判の対象となっている立場は、ある存在論的・認識論的アプローチと密接に関係しているのである。

次に主張されている立場を見てみよう。その立場では、図書館について理解するためには、ドキュメント管理の科学を打ち立てるだけでなく、我々の文化に含まれるものの考察が必要だと言われていた。また、情報概念を考えるときには、それが我々の目的や実践や社会的文脈とどのように関係しているかを考慮する必要があると言われていた。このような考え方は、何を実在すると考えるかはそれを捉える人から分かれて考えられることが出来ないという存在論的前提や情報は社会的に捉えられその内容が理解されなければならないという認識論的前提を含んでいる。主張されている立場も、ある存在論的・認識論的アプローチと密接に関係しているのである。

以上のように考えるならば、類型5に該当する論文においても類型1や類型2の意味での「哲学を使って」は無関係ではないように思われる⁴⁷⁾。

V. 図書館情報学研究と哲学

今まで見てきたように、哲学と関係している図書館情報学研究において、多くの場合、「哲学」は、図書館情報学研究に対する存在論的・認識論的アプローチを示すものとして扱われていた。このような状況は、図書館情報学研究と哲学の関係に対して、どんな示唆を与えることができるのだろうか。

それを明らかにするためには、現在の哲学研究の方法について考えることが役に立つ。現在の分析哲学と呼ばれる分野での研究の方法にはさまざまなものがある。たとえば、反例を出すことによって議論の論理的矛盾を突くもの、思考実験を使って我々の直観に訴えるもの等がある。また、近年、実験哲学という考えも言及されている⁴⁸⁾。それが近年盛んであるのは、直観に訴え

るだけでは主張を正当化できないと考える人々がいるからである。

そのようにさまざまな方法があり、それらの方法について議論されている中で、何らかの存在論的・認識論的アプローチをとることが図書館情報学研究にとって有効であるということを示すことも、存在論や認識論を巡る問題を解決するための1つのアプローチの仕方である。もし何らかの存在論的・認識論的アプローチをとることが図書館情報学研究にとって有効であるということを示せるなら、その存在論的・認識論的アプローチが適切であることになる。どのような存在論的な考えが望まれるか、どのような認識論、知識論が望まれるかということ判断する際に、図書館情報学研究の成果を使えるかもしれない。

一方、図書館情報学研究の側からも、存在論や認識論という視点を入れることに意味があることは、これまで整理してきた論文を見れば明らかである。存在論的・認識論的アプローチの違いが、図書館情報学研究にどんな違いをもたらすのか。どのような存在論的・認識論的アプローチをとるならば図書館情報学研究が促進されるのか。どのような研究にどのような視点がふさわしいのか。それらの考察は、図書館情報学研究にとっても重要である。

ただし、ここで言う「使って」は先に見たような基礎づけ主義的なものではないことが注意されなければならない。また、それだけでなく、ここで「哲学を使って」と言われている際、図書館情報学研究の外側に哲学があり、それを外部から借りてきて図書館情報学研究を促進すると考えないよう注意しなければならない。今まで見てきたように、存在論的・認識論的アプローチは図書館情報学研究の中に入り込んでいる。図書館情報学研究の対象を巡る存在論をどのように考えるか、知識や情報をどのようなものとして捉えるか、それらを我々が認識するというは何を意味するのか、さまざまな考察は、図書館情報学研究の内部にあるものである。また、哲学研究において、実際に知識がどのように形成されるか、どんな存在論をとれば何が言えるか等を図書館情報学研究で

の成果と照らし合わせて考えることは、哲学研究内部で大きな意味を持ちうる。両者がまったく離れた別のものとしてあり、「哲学を使って」図書館情報学の問題を解決するとか、哲学に図書館情報学の成果を輸入するとかというわけではないのである。ここで言っている「哲学を使って」や「図書館情報学研究の成果を使って」は、相互に独立する2つの研究分野が、その成果だけをお互いに利用するという意味ではないのである⁴⁹⁾。

VI. おわりに

本論文では、図書館情報学研究において哲学がどのように扱われているのかを整理することによって、図書館情報学と哲学の関係の可能性を考察することを目的としていた。そのため、図書館情報学研究の中で哲学への言及が現れている論文を整理し、どのような形で哲学への言及が現れているか、哲学はどのように使われているかを検討した。そして、図書館情報学研究における哲学の利用は、「個別科学に基礎を与え、知識に到達する唯一の正しい方法を手に入れるため」というよりはむしろ、「存在論的、もしくは、認識論的にどのような立場をとることによって、図書館情報学研究をより実りあるものにするのかを示すため」になされているという考えに至った。そのことから、存在論的・認識論的アプローチと図書館情報学研究という視点が、図書館情報学研究と哲学研究の両方にとって意味があることが示唆された。

けれども、これまでの議論は、どのような存在論的・認識論的アプローチが図書館情報学研究にとって適切であるかを示すものではない。また、これまでの議論によって、図書館情報学研究一般にふさわしい存在論的・認識論的アプローチがあるのか、それとも、折衷主義が望まれるのかが明らかになったわけでもない。さらに、相互に独立した分野がお互いを利用し合っているのではない「使って」が実際どのようにして成果を結びうるのかもまだ明らかではない。それを考えていく際に、類型5に該当するような論文の考察は、更なる可能性を示すかもしれない。なぜなら、第IV章

で見たように、そこでは、図書館情報学自体をどのように考えるのかという問題が考察され、「哲学を使って」が表だって現れていない一方で、その背後には存在論的・認識論的前提が含まれているからである。そのように、思考の中に組み込まれた前提が、その思考の内部で我々に影響を与えているとしたら、そこでの存在論的・認識論的前提は、それぞれの学問の成果を借りてきてというのではない「使って」の可能性を示すものになるだろう。それらの、存在論的・認識論的アプローチの適切さを巡る問題や「哲学を使って」を巡る更なる問題に取り組むことは、今後の課題である。

謝 辞

筑波大学名誉教授の石井啓豊先生には、「図書館情報学と哲学」について漠然と考えていたときに相談にのっていただき、いろいろな文献を教えてくださいいただきました。元筑波大学の武者小路澄子先生には何回か原稿をお読みいただき、多くの貴重なご意見やご指摘をいただきました。また、筑波大学の緑川信之先生はじめ、多くの方に、いろいろ相談にのっていただきました。皆様に、深くお礼申し上げます。

注・引用文献

- 1) 三田図書館・情報学会編。図書館・情報学研究入門。勁草書房, 2005, 226p.
- 2) 根本彰。“図書館情報学の領域と特性”。図書館情報ハンドブック。第2版。丸善, 1999, p. 1-11.
- 3) “図書館情報学”。図書館情報学用語辞典。第4版。丸善, 2013, p. 177.
- 4) 津田良成編。図書館・情報学概論。第2版。勁草書房, 1990, 240p.
- 5) 緑川信之。“図書館・情報学への招待”。図書館・情報学研究入門。三田図書館・情報学会編。勁草書房, 2005, p. 185-218.
- 6) 石井啓豊。“図書館情報学の展望：知識共有の総合科学”。図書館情報大学史：25年の記録。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科編。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科, 2005, p. 28-40.
- 7) 伊勢田哲治。認識論を社会化する。名古屋大学出版会, 2004, 331p.
- 8) 根本彰ほか編。図書館情報学の地平：50のキーワード。日本図書館協会, 2005, 353p.
- 9) Butler, P. 図書館学序説。藤野幸雄訳。日本図書館協会, 1978, 135p.
- 10) Shera, J. H. 図書館の社会学的基盤。藤野幸雄訳。日本図書館協会, 1978, 185p.
- 11) Ranganathan, S. R. 図書館学の五法則。森耕一監訳。日本図書館協会, 1981, 425p.
- 12) 根本彰。“図書館情報学の理論的基盤”。図書館・情報学研究入門。三田図書館・情報学会編。勁草書房, 2005, p. 3-6.
- 13) 松林正己。「情報哲学 (the Philosophy of Information)」の誕生：図書館情報学理論研究における新たな動向。カレントアウェアネス, 2005, No. 283, p. 18-21.
- 14) Brookes, B. C. The foundations of information science. part 1. philosophical aspects. Journal of Information Science. 1980, vol. 2, p. 125-133.
- 15) Special edition, library and information science and the philosophy of science. Journal of Documentation. 2005, vol. 61, no. 1, p. 5-163.
- 16) Hjørland, B. Library and information science and the philosophy of science. Journal of Documentation. 2005, vol. 61, no. 1, p. 5-10.
- 17) Budd, J. M. Phenomenology and information studies. Journal of Documentation. 2005, vol. 61, no. 1, p. 44-59.
- 18) Special edition, the philosophy of information. Library Trends. 2004, vol. 52, no. 3, p. 373-669.
- 19) 検索した条件は、次のものである。(SU.exact (“Philosophy”)) and (SU.exact (“LIBRARY AND INFORMATION SCIENCE”)) (ここでの考察は、2013-05-08の検索結果に基づいている。)
- 20) Budd, J. M.; Hill, H.; Shannon, B. Inquiring into the real: A realist phenomenological approach. Library Quarterly. 2010, vol. 80, no. 3, p. 267-284.
- 21) Jones, B. Reductionism and library and information science philosophy. Journal of Documentation. 2008, vol. 64, no. 4, p. 482-495.
- 22) Jones, B. Revitalizing theory in library and information science: The contribution of process philosophy. Library Quarterly. 2005, vol. 75, no. 2, p. 101-121.
- 23) Hansson, J. Hermeneutics as a bridge between the modern and the postmodern in library and information science. Journal of Documentation. 2005, vol. 61, no. 1, p. 102-113.
- 24) Radford, G. P.; Radford, M. L. Structuralism, post-structuralism, and the library: de Saussure and Foucault. Journal of Documentation. 2005, vol. 61, no. 1, p. 60-78.
- 25) Wikgren, M. Critical realism as a philosophy

- and social theory in information science? *Journal of Documentation*. 2005, vol. 61, no. 1, p. 11-22.
- 26) Savolainen, R.; Talja, S.; Tuominen, K. "Isms" in information science: constructivism, collectivism and constructionism. *Journal of Documentation*. 2005, vol. 61, no. 1, p. 79-101.
- 27) Hjørland, B. Comments on the articles and proposals for further work. *Journal of Documentation*. 2005, vol. 61, no. 1, p. 156-163.
- 28) Selden, L. On Grounded Theory-with some malice. *Journal of Documentation*. 2005, vol. 61, no. 1, p. 114-129.
- 29) Johannisson, J.; Sundin, O. Pragmatism, neopragmatism and sociocultural theory: Communicative participataion as a perspective in LIS. *Journal of Documentation*. 2005, vol. 61, no. 1, p. 23-43.
- 30) Hjørland, B. Empiricism, rationalism and positivism in library and information science. *Journal of Documentation*. 2005, vol. 61, no. 1, p. 130-155.
- 31) Basden, A.; Burke, M. Towards a philosophical understanding of documentation: A Dooyeweerdian framework. *Journal of Documentation*. 2004, vol. 60, no. 4, p. 352-370.
- 32) Frohmann, B. Documentation redux: Prolegomenon to (another) philosophy of information. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 387-407.
- 33) Budd, J. M. Relevance: Language, semantics, philosophy. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 447-462.
- 34) Hjørland, B. Arguments for philosophical realism in library and information science. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 488-506.
- 35) Fallis, D. On verifying the accuracy of information: Philosophical perspectives. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 463-487.
- 36) Cole, C.; Spink, A. A human information behavior approach to a philosophy of information. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 617-628.
- 37) Furner, J. Information studies without information. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 427-446.
- 38) Day, R. E. Community as event. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 408-426.
- 39) Brier, S. Cybersemiotics and the problems of the information-processing paradigm as a candidate for a unified science of information behind library information science. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 629-657.
- 40) Cornerius, I. Information and its philosophy. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 377-386.
- 41) ここでの「主観性を客観性の論理的な反対語とみなすこと」は、「主観性の厳密な否定が客観性であり、客観性の厳密な否定が主観性であり、すべての場合を主観性と客観性に分けることができると考えること」を意味する。
- 42) 北澤武；古賀正義編. 質的調査法を学ぶ人のために. 世界思想社, 2008, 268p.
- 43) ここでは、「帰納」は、観察された事柄から、一般的、普遍的な主張を形成することを意味する。
- 44) 戸田山和久. 知識の哲学. 産業図書, 2002, 272p. (哲学教科書シリーズ).
- 45) Quine, W. V. O. "Two dogmas of empiricism". *From a Logical Point of View: 9 Logico-Philosophical Essays*. 2nd ed., Harvard University Press, 1980, p. 20-46.
- 46) 以下では、「存在論的・認識論的アプローチ」は、「存在論的、もしくは、認識論的アプローチ」の略として使われる。
- 47) この点を明確にするためには、類型5に該当する論文についてもう少し詳細に検討する必要があると思われる。しかし、ここでは、「哲学を使って」と無関係ではなさそうだという指摘にとどめておく。それについてはまた別の機会に論じたいと考えている。
- 48) たとえば、科学基礎論学会2012年度の秋の研究例会では、「実験哲学の中の認知と認識」というテーマや「On the very idea of experiment: External critiques of X-Phi」というテーマのワークショップがなされている。
- 49) 哲学の領域では、2008年秋に「応用哲学会」が設立され、哲学と他領域との関係についての議論が盛んになっている。「哲学を使って」をどのように捉えるかもそこでの大きな問題である。戸田山和久, 出口康夫編. 応用哲学を学ぶ人のために. 世界思想社, 2011, 362p., および, 文献50)を参照。
- 50) 戸田山和久ほか編. これが応用哲学だ!. 大隅書店, 2012, 312p.

要 旨

【目的】 本論文の目的は、哲学と図書館情報学（LIS）の関係を検討することである。

【方法】 本論文は、哲学とLISの関係について、文献に基づく分析を行う。LIS分野での哲学に関係する最近の重要な論文（2003年5月～2013年4月に刊行）が集められ、それらの論文の内容の特徴が検討される。

【結果】 LIS分野での哲学に関係する最近の論文のほとんどは、LIS研究のために、哲学（たとえば、ネオプラグマティズム、現象学、解釈学、ポスト構造主義など）を使っている。これらの論文は、哲学がLISの発展に寄与することができるかと論じている。しかし、これらの論文は、LIS研究の基礎として哲学を使おうとしているのではない。言い換えるならば、哲学が合理的方法についてのものであり、その合理的方法がLISに取り込まれ、もしくは、応用され、それによってLISが科学になると主張しているのではない。そうではなく、哲学は、LIS研究への存在論的、もしくは、認識論的アプローチとして現れている。これらの論文は、どのような存在論的・認識論的アプローチがLISの発展に寄与することができるかを論じているのである。そして、そのような議論は、LIS研究における具体的な例を使うことによって説明されている。ある存在論的・認識論的アプローチがLISの発展に寄与しうるかどうかをそのように論じることは、LIS研究にとって重要であるだけでなく、哲学の研究にとっても重要である。なぜなら、何らかの存在論的・認識論的アプローチがLIS研究にとって有効であるならば、そのことは、その存在論的・認識論的アプローチが適切であるということを示すことになるからである。そのように、哲学とLISは相互に関係している。